

2020年1月28日

2020年1月 Nr. 466

今回は「失敗」についての考察です。

失敗は人生にはつきものです。失敗は人の一生を通じてついてまわるもの、随伴するものであるとも言えるかもしれません。人は再三再四失敗することに対し心の準備をしておかなければなりません。当然のことながら困難な仕事・課題を成し遂げた達成感も経験しており、こちらをより頻回に経験したいと考えています。

2019年1月10日のこの放送の担当記者でもあるヘヒトさん (Herr Hecht) は、多くの人が購入した本を書いています。ヘヒトさんの2017年の最新作である「インターネットにおける花嫁探し」 („Auf Brautschau im Internet“) は、以前のヘヒトさんの著作ほどは売れてはいません。ヘヒトさんのこの著作は、2009年のもう一つの作品と同様、ピーパーフェアラク (Piper Verlag 1904年に創立で在ミュンヘンの大衆文学やノンフィクション分野の書籍を扱う出版社) から出版されました。一方では、ヘヒトさんの他の8作品は10社の出版社から発売されています。ヘヒトさんは、何年もの間、作家として多くの成功を収めてきましたが、今やピーパーフェアラクのヘヒトさん担当編集者はヘヒトさんに、当面本の執筆は止めることを勧めてきています。また、他の複数の出版社も、ヘヒトさんが提案した複数の出版企画案を断ってきている状況にあります。

ヘヒトさんの16歳になる息子は、ヘヒトさんが南西ドイツ放送 (SWR) のために「失敗」というテーマについてのある放送番組に取り組んでいることを知ったとき、冗談のつもりで、「それだったらきっとパパが精通しているテーマかもね」と言いました。ヘヒトさんはこの放送番組のために、人は失敗とどう向き合っているかを自分自身でじっくり考えただけでなく、ヘヒトさんと類似の本を書いている他の3名の作家とも話し合いました。

ベルントさん (Frau Berndt) は、南ドイツ新聞 (die Süddeutsche Zeitung) の編集者を務めていますが、その傍らで「満足」について考察した本を出版していました。シュピッツァーさん (Herr Spitzer) は、心理学者です。シュピッツァーさんはその本の中で人はいかに完璧主義を克服するかというテーマに取り組みました。ヴォルファースさん (Frau Wolfers) はカトリック教徒です。ヴォルファースさんは、「勇気を持つための技法・テクニク」 „Die Kunst, mutig zu sein“ についての本を書きました。

ヘイトさんは、成功が人生で最も重要であるべきだという考えや、常に成功を収めない人に対しとても否定的な反応をするのは良くないと思っています。その事例は、実はヘイトさんが1人のガールフレンドとある喫茶店にちょっといたことがありましたが、そのときに身をもって経験したものでした。その場にはガールフレンドの知り合いの男性もいましたが、ガールフレンドがその男性にヘイトさんを紹介し、ヘイトさんが本を書いていることを伝えると、その男性がすぐさまスマートフォンを取り出し、インターネットでヘイトさんの本がたくさん売れているかどうかを検索したのです。その男性はヘイトさんの新作の本の売れゆきが良いとは全くいえなかったことが分った途端、ヘイトさんと話す興味を失ってしまいました。

シュピッツァーさんは、インターネットは、人生における多くのことが成功や失敗とは全く関係ないにもかかわらず（例えば、森で散歩をする場合など）、人が以前より成功のことをより気にかけるようになる結果をもたらしていると思っています。ヴォルファースさんは、人間は成功や失敗以上のものであると指摘しています。重要なのは、人があるがままに、つまり人のすべての欠点や失敗も含めて、他の人たちから受け入れられることであるといえます。

失敗は、人がどのような人間かという認識が人に育つ結果になりえますし、また人の限界を知るのに人に役立つ結果になります。人はこの限界の範囲の中で、平穩に生活するべきです。天使たちは、自分自身を余り重要に考えないから、飛ぶことができるという言い方がありますが、ヴォルファースさんはこの箴言が気に入っています。ベルントさんは、人間は成功と結びついている幸福感ゆえに成功を必要としているという意見です。目標を追求し、達成することで人は生きるといいます。

失敗したことに對し腹を立てることもまた、従って、全く普通であるといえます。しかしながら、気をつけなければならないのは、腹を立てすぎないことだといえます。これは訓練することができますし、他の人及び自分自身のあらゆる期待には応えることができないし、常に期待に応えることを望まないで心の準備をすることができるといえます。失敗は評価の問題でもあるということです。人は多くのことをできないということを受け入れるべきであり、失敗は人に他の方策を探る機会を提供してくれもするといえます。

シュピッツァーさんは、失敗したことを理由に自分が無能な人間と感ぜないよう警告します。人は自分自身に失望しているかもしれませんが、自分自身の価値は、人が成功するというに左右されてはならないといえます。というのは、どの失敗も人がどのような人間であるかということと関係するわけではないからです。人があるテニスの試合に負けた

からというだけで、その人が下手なテニスプレイヤーということではないといいます。敗北を人生の一部として受け入れなければならないといいます・・・。

さて、ヘイトさんは、初対面の相手が自分の著書の売れ行き具合をヘイトさんの前でスマートフォンを使って検索するということを経験していますが、私はこの行為はその男性のマナー違反であると思いますし、初対面の相手に対し失礼だろうと思います。このような行為に対しては一般的にドイツではどのような反応があるのでしょうか。その時同席していたヘイトさんのガールフレンドはその男性の知り合いでもありますので、その男性の行為を制止するか、やんわりと忠告すべきだったのではないかと私は思います。ヘイトさんは失敗を許容しない社会ゆえに成功しないことに対し否定的な態度を取った男性の例を自分の体験を通じて語っているように思えますが、私にはむしろ、ヘイトさんの前でスマートフォンを使って検索した初対面の男性の行為の非常識さが気になりました。

また、放送の中でシュピッツァーさんが100点満点のテストで80点を取った場合、その得点は成功と言えるのか、それとも失敗というべきなのかと言う問いを發し、その期待値・要求値が重要なので、成功と失敗のいずれとも言うことができると述べています。正にその通りだと思います。私はテストの場合には、難易度が期待値を上げさせもし、下げさせもする要素のなるからだろうと思います。つまり、難しいテストであれば、期待値が低くなる結果、例えば80点であれば上出来であると思えますし、易しいテストであれば勢い期待値が高くなるため、80点でも不足と言えるからです。

さて、先日のゲーテの授業で aus gesundheitlichen Gründen/Gesundheitsgründen 「健康上の理由で」という表現が出てきたばかりで、この表現がまだ何となく頭にすみに残っていたところで、今回の放送でも aus Zeitgründen (Beiheftの54ページ) 「時間不足のために、時間的な理由から」という理由を表す似たような表現に出会しました。

そこで「・・・の理由で、・・・の理由から」を表す表現を手元の辞書で調べてみましたところ、日常すぐ応用できそうな次のような表現が出てきました。

aus Platzgründen 場所が狭いため、紙面の都合で

aus persönlichen Gründen 一身上の理由で、個人的な理由で

aus unerfindlichen Gründen わけのわからない理由で、不可解な理由で

上記の反対で aus verständlichen Gründen 納得できる理由で、もっともな理由で

aus wirtschaftlichen Gründen 経済的な理由で

aus zwingenden Gründen やむを得ぬ理由で

また、課題の最終部で warnen を使った表現が出てきますが、warnen は私を含めたドイツ

語学習者にとっては要注意の単語だと思います。例えば手元の辞書に記載の次の例文のように、vor の次に単語が来る場合は特に問題はないと思います。

Er warnte mich vor Taschendieben. 「彼は私にすりに注意するようにと言った」
Die Polizei warnt vor Glatteis. 「警察は路面凍結への注意を呼びかける」

ところが、以下の例文のように不定詞で表す行為が続く場合は、注意が必要だと思います。ドイツ語の文では否定語がないにもかかわらず、日本語では否定語を挿入したほうが自然に聞こえるから不思議な現象だと思います。

Sie warnte ihn davor, zu schnell zu fahren.

「彼女は彼にあまり車のスピードを出さないようにに駄目を押した/警告した」(「出すことに対して」でも意味は通じるとは思いますが、やや不自然な感じを受けます)

Ich habe ihn davor gewarnt, allein in die Berge zu gehen.

「私は彼に1人で山に入らないようにに注意/警告した」(「入ることに対して」でも意味は通じるとは思いますが、やや不自然な感じを受けます)

従って、「・・・に借金などをするものではないよという」をドイツ語で表現する場合、jn davor warnen, Schulden zu machen が正しく、jn davor warnen, nicht Schulden zu machen と nicht を入れるのは誤りである旨の解説が辞書に掲載されています。ドイツ語から日本語に訳す場合は、「・・・しないように警告する」と訳せても、日本語で「・・・しないように警告する」という文がある場合、nicht を入れてしまうようなミスをする可能性がありますので、本当に要注意だと思います。これに加え、日本語では警告する相手は「誰々に対して」となり一見 3 格目的語が来るように見えますが、上記例文が示すとおり、ドイツ語の文では 4 格目的語を取ることに併せて注意すべきだと思います。一方でしかしながら、似た意味を持つ abraten (誰々に何々を思いとどまるよう忠告する) の場合は、Sie riet ihm davon ab, allein dorthin zu gehen. のように 3 格目的語が来ますので、少々ややこしいですが個々に習得していくほかないようです。

K. K.

2020年2月28日

2020年2月 Nr. 467

今回は、今や80歳を超える6人のドイツ人女性の長年に亘る友情が話題となっています。さて、女性取材記者エヴァ・ヴォルク (Eva Wolk) さんのレポートに登場する女友達の5人、エレン・イングリト・バナー (Ellen-Ingrid Banner) さん、ギーゼラ・ブロッホ (Gisela Bloch) さん、ローゼマリー・ハーマツハー (Rosemarie Hamacher) さん、ベアーテ・ヴィレムゼン (Beate Willemssen) さん、ウラ・ドーレ (Ulla Doré) さんは、ハイデルベルク大学の通訳養成機関で一緒に勉強した仲です。彼女たちは、第二次世界大戦が勃発する少し前に生まれました。つまり戦争終結時には6歳~7歳でしたが、今では80歳を超える年齢となっています。彼女たちは皆、決して同じ地域には住んだことはありませんでしたが、1年に一度会って、2,3日の間一緒に過ごしています。この集まりは、ハイデルベルク大学でのディプローム授与30年年記念式典での再会を機に、この5人の仲間と共同発起人である6番目の女性が発案して以来始まったものでした。

その女性のファーストネームはイルムガルト (Irmgard) さんですが、放送では姓名については言及されていません。イルムガルトさんは既に、数年前に亡くなっています。イルムガルトさんは、自分たちの会合の多くを企画・準備をしてきました。彼女はまた、ドーレさんがイギリスから夫と2人の娘たちと一緒にシュトゥットガルトに来られるように航空券を手配してあげてもいました。この会合にはいつも文化的催しもつきものです。イルムガルトさんはいつも、最も素晴らしいコンサートの切符を手配してくれていました。

彼女たちの会合では誰もが、一つ前の会合以降、どのように過ごしたか、どんないいことがあったか、どのような芳しくないことに遭遇したかを話します。彼女たちは皆、お互い近くに住んでおらず、年1回しか会えませんので、話す内容が自分たち以外に伝わることを心配することなく、互いに洗いざらい話すことができます。彼女たちが、悩み、心配事、喜びそれにさまざまな体験について他のメンバーに話す内容は、この仲間内に留まっています。彼女たちの間には信頼関係があります。そのようにして彼女たちは、ちょっと余り良いとはいえないことをしでかしてまったことについても話すことができます。

ブロッホさんが特にすばらしいと思うのは、自分たちの会合がどの回も前回の会合の続きのようになっていることです。1年後であっても、繋がりを再構築するためにまずは天候の話からするということをすることもなく、さっと彼女たちは本題の会話を引き続き行っています。そして彼女たちは互いに非常に親密なので、誰も他のメンバーに感銘を与えよ

うとした話をしようとはしません。何と立派な夫、何とすばらしい子や孫が自分にはいるということを他のメンバーの前で自慢するということは意味がないだろうといえます。ここではすべてありのままに率直に話すことができます。

彼女たちすべてにとっては、主要専攻科目はフランス語でした。バナーさんは他の 4 人をこの会合のためにケルンに招待し、ある宿屋に宿泊してもらいました。話すために彼女たちはバナーさんの居間に座りました。初日の夜、全くプライベートなことを多く互いに報告し合い、二日目の午前中は自分たちの友情の本質をなすものについて語り合いました。その場には女性取材記者ヴォルクさんはまだ居合わせませんでした。二日目の午後になってようやく、ヴォルクさんがこの放送の録音をするのたけに加わり、5 人すべてに対してまずはマイクに向かって自己紹介をしてくれるよう依頼しました。

ハーマッハーさんはケルンの生まれです。ハーマッハーさん一家には家政婦と子守の若い女性がそれぞれ 1 人いましたが、爆撃に遭い、繰り返し空襲で焼け出されました。ハーマッハーさんの父親はすでに早世していました。ハーマッハーさん一家は疎開させられ、ハーマッハーさんが 10 歳の時、一家はいつも木造バラックに住んでいました。しかしながら、徐々にではありますが、また一家の境遇が改善されていきました。ハーマッハーさんは、すでにアビトゥーア前に自らの大学での学業と自分の職業を上姉といっしょのスイス縦断の自転車旅行で決めていました。その旅行ではジュネーブにもやって来て、当時の国連ビルの中で数時間にわたり議場の傍聴席に半日も座っていました。そこでは 5 カ国語で通訳されていました。それがハーマッハーさんはとても興味深かったので、彼女にとって将来の職業を心に決めました。ハーマッハーさんは自分の職業を愛し、尊敬できる夫に巡り会いましたが、ハーマッハーさんがまだ 50 歳にならないうちに夫はもう他界してしまいました。それ以降、ハーマッハーさんは、すべてに対し自分自身で責任を負わなければなりませんでした。

オルデンプルクはニーダーザクセン州の行政区域の一都市都市であり、またニーダーザクセン州の行政区域・県 (Provinz) でもあります。オルデンプルク市では Beiheft の 418 号及び 419 号で 2 枚の写真が撮影されました。もっとも、彼女たちがいくつかの村の教会を見学したその村々というのは、ハーマッハーさんがちょっとまた会合の担当をした時でしたが、オルデンプルク県にあります。

ヴィレムゼンさんにとって人生最悪の経験は 1945 年 2 月 13 日のドレスデン空襲でした。ヴィレムゼンさんたちが炎から逃れて安全な場所に避難しようとしたとき、家だけでなく、庭も燃えていましたので、まさに燃えている人々の上を乗り越えて行かなければなりませんでした。それ以来ヴィレムゼンさんはひどく臆病になりました・・・。

さて、今回登場する 6 人の女性は、同じ大学を卒業後、ある時期に再会した際の提案により爾来、毎年会合を開くことになりました。彼女たちの来し方について、イベント、その発生西暦年及び年齢を時系列で振り返ってみたいと思い、以下の様に推測しました。会合は 50 歳台半ばにスタートし、放送の取材時点で 30 回近く行われていることが分ります。彼女たちの同窓会会合の切っ掛けは、ディプローム授与 30 年記念式典での再会でしたが、その意味でその式典は彼女たちにとって、単なる 1 回の記念式典以上の重みがあったに違いないと言えます。

生誕年 1938 年～1939 年

終戦 1945 年 (6, 7 歳)

大学卒業 1962 年～1963 年 (24 歳?)

ディプローム授与 30 年記念式典 1992 年頃 (54 歳?)

同窓会会合 1993 年～2019 年 (55 歳～81 歳?)

80 歳という年齢を考えますと、当時のドイツではまだ大学進学率がかなり低かった頃だと思われ、彼女たちはそれぞれその少数の高学歴者の 1 人だったのだらうと思います。毎年会合を開くことにより、翌年は前年の続きからの会合になるというのが何とも興味深い話です。また、肉親の自慢話ではなく、すべてありのままに率直に話すことができるというのも素晴らしいと感じました。また、放送で彼女たちの声を聞くと、放送の取材が入っていることを割り引いても、皆さん矍鑠としており、80 歳超という年齢を感じさせない声だと感じました。それどころか、特に AfD (「ドイツのための選択肢」) についての議論には熱がこもり、私には結構早口に思えましたし、語気に力を感じさせるほどでした。80 歳超という年齢を考えれば、5 人とも何かしらの病気を抱えているのだらうと想像しますが、放送およびテキストを参照する限りではこの点については言及がされていません。それぞれがドイツ各地に散らばって住んでいるにもかかわらず、高齢化が進むドイツとはいっても、80 歳超の同窓生 5 人が年に一度集まるというのも他に余り例がないのではと思います。今後とも彼女たちのこのいわば同窓会 (Klassentreffen) ができるだけ長く続いて欲しいと思いました。

また、今回強く私の印象に残ったのは 2 人の女性の体験でした。一つは、自転車旅行で立ち寄ったジュネーブの国連ビル議場で傍聴席に座り五カ国語の通訳を見学したことにより自らの職業を決めたというハーマッハーさんの将来への希望溢れる体験。それにドレスデン空襲時に炎の中を燃える人の上を越えて必死に逃げたというヴィレムゼンさんの恐怖の体験でした。特に涙ながらに自らの恐ろしい体験を語るヴィレムゼンさんの話しぶりには私には外国語であるドイツ語を通じて聞いたものとはいえ、胸に迫るものがありました。

K. K.

2020年3月22日

2020年3月 Nr. 468

今回は、親を見捨てる子供、子供から見捨てられる親が話題となっています。

シュレーダーさん (Frau Schröder) は女性ジャーナリストです。シュレーダーさんは、新聞向けの原稿を書くだけでなく、放送局でも働いています。しかしながら、シュレーダーさんが今回取材した番組の中ではその生の声は聞くことができません。ナレーターが放送原稿を読み上げているからです。シュレーダーさんが二つのインタビューで録音したのも聞くことができません。これは放送局の録音用スタジオからの男性ナレーターと女性ナレーターを通じて聞きます。なぜならば、二人のインタビュー相手は名前を知られたくないと思っていますし、インタビューの録音が放送された場合、声で誰のことだかが分ってしまうかもしれないからです。従って、その二人は本名を使ってラジオの聴取者には紹介されていません。ハーマンさん (Frau Haarmann) とヴォースさん (Frau Voos) の二人だけについては、彼女たちが語った内容だけでなく、その声もラジオの聞き手は聞くことができます。

ハーマンさんは、世間では子供達はその両親との接触を断つということがますます頻繁に発生していると思っています。ハーマンさんは5年前、この問題について「家庭内での接触断絶」 („Kontaktabbruch in Familien“) というタイトルで一冊の本を書きました。ハーマンさんは精神療法医です。彼女の診療所には子供達から見捨てられた両親だけでなく、両親を見捨てた子供達も訪れます。しかしながら、この放送のためにシュレーダーさんは、子供たちにはインタビューしていません、両親だけにインタビューしました。

ベラーさん (Frau Böhler)、つまり、この放送ではこの匿名で登場する女性は、もう70歳になりますが、ベルリンの北西部の彼女の戸建ての住宅で行われたインタビューでは明らかに実年齢より若い印象をシュレーダーさんに与えました。ベラーさんの息子が彼女との接触を断った時、もう20代半ばでした。ベラーさんは長い間、このようなことは本当に希にしか起きないと考えていましたが、調査してみると、社会学者たちの推定では両親たちと接触を断った成人の子供が10万人もいることを探り出しました。

ハーマンさん (Frau Haarmann) は、子供達がもうこれ以上自分の親と関わりを持ちたくないと思う理由には2種類あると考えています。一つの理由は、子供達が内面的な安定性を養成することを可能にするために安全や安心の感情を必要としていることと関係しているといいます。この感情が欠けている場合、子供達は両親に背を向けます。もう一つの

理由は、一部の子供達は自分の両親から認められていないと感じるためであるといい、この理由が更に重要であるといいます。

ハーマンさんと同様精神療法医であるヴォースさんも雑誌のために記事を書いており、また書籍も出版しています。ヴォースさんの推測では、接触を断つことは、ベーラーさんを苦しめただけでなく、ベーラーさんの息子にも辛いものだっただろうといいます。ヴォースさんは、両親がしばしば自分の子はそのことに全く苦悩していないという印象を持っていると思っていますが、子供達もまた両親と全く同じように苦しんでいると思っています。ヴォースさんはしばしば、両親に背を向けた成人した子供たちの治療に当たっています。子供達が沈黙の理由を両親に伝えないのは、多くのことが無意識の領域からきており、従って、それに対し子供達だけでなく、両親も言葉が足りないことが原因であるといいます。

ベーラーさんの息子は、家族全員との接触を断ち切りましたが、それは自分の両親だけでなく、自分の兄弟・姉妹、叔母さんたち、叔父さんたち、それに祖父母との接触も含まれます。ヴォースさんは、多くの接触断絶はこうした経過を辿ると言います。というのは、多くの子供たちにとって、彼らが自分の母親または父親に限って接触を断ち切ろうとするならば、状況は更に良くないからです。

ベーラーさんと同様実のところは本名は別の名前であるオースターベルクさん (Herr Osterberg) は、50代前半ですが、すでに白髪です。オースターベルクさんは3年前、この名前で自らの不幸な幼年時代について書いた「冷たい家」 („Das kalte Haus“) というタイトルの1冊の本を出版しました。オースターベルクさんは、ベーラーさんの息子と同様、両親に背を向けてしまいました。しかしながら、オースターベルクさんの場合は、それでも誕生日には両親に電話をかけました。この電話での会話時間は毎回、2、3分ではないとしても、です。オースターベルクさんは、両親と1年に1回はしぶしぶではありましたが、会っています。

ベーラーさんの息子は、母親との接触をもはや全く断っています。オースターベルクさんの場合とは異なり、1年に一度会うというような表面的な接触でさえ全く行っていません。しかしながら、ベーラーさんの息子は母親の生活から13年の間姿を消した後で、今から8年前のある日、ベーラーさんの家の戸口に立っていました。その後1週間家に滞在していました。ベーラーさんの息子が突然来訪したのと同じ位驚いたのは、彼が再び姿を消してしまったことです。それ以来全く連絡が取れなくなりました……。

さて、今回話題となっている「親を見捨てる子供、子供から見捨てられる親」の問題については、私自身今まで殆ど考えたことがありませんでしたので、親を見捨てた成人した子

供の数がドイツでは専門家の推計で10万人にも達するということに対してはとても衝撃を受けました。日本ではどのような状況にあるのかは分かりませんが、少なくとも今回の放送で紹介されたような事例（成人した子供が両親との接触を突然断ち切る）が問題になっているというニュースは聞きません。もし、あるとすれば、年老いた両親または両親のいずれかの介護の辛さを耐えきれず親を捨てるということはあるようです。そのような事例は今回問題となっているものとは状況が異なります。

今回の放送・課題において特に印象深かったのは、ベラーさんのケースです。ベラーさんの息子は母親の元から13年の間姿を消した後で、今から8年前のある日、ベラーさんの家の戸口に突然現れました。ベラーさんがとても驚き、喜んだのもつかの間、その後1週間家に滞在した後、再び姿を消してしまったといます。これによりベラーさんは2度のショックを受けたこととなります。1週間の滞在中、両者の間では衝突はなかったようです。この間に何が話し合われたのかについては放送では言及がありませんので、分かりませんが、解決策が見いだされないままに2度目の失踪になってしまったことはとても残念だと思いました。2度に亘る失踪によりベラーさんはより大きな心の傷を負ってしまったような気がします。ベラーさんおよびベラーさんの息子共、このままの状態が続くことを望んでいるとは思えませんが、関係修復を半ば諦めかけているベラーさんからはどうしようもできないことを考えると、ベラーさんの息子が何とか解決策を見つけることを願うばかりです。また、ベラーさんの息子からやはり関係を断たれてしまっている他の3人の兄弟・姉妹たちがどう考え、行動するかにも期待を寄せたいとは思いますが、これも難しいでしょうか。

K. K.

2020年5月1日

2020年4月 Nr. 469

さて、今回は、罪を犯した人の「刑罰」が話題になっています。

Jus は、その複数形が Jura となるラテン語の単語です。ある人が大学で Jura (法学) を学んでいると言う場合、その人は法律学を学んでいることになり、試験を受けて合格すれば法律家です。法律家は、大抵、弁護士、検察官または裁判官になります。弁護士は、被告人を助け、検察官は国家の利益を代表し、裁判官は被告人について判断します。

裁判ではまず、被告人が何をしたか、被告人がどの法律に違反したかが立証されます。その後で、裁判所は被告人を処罰しなければなりません。区裁判所がドイツでは最下級審を構成します。そこではただ一人の裁判官が判断するか、一人の裁判官と二人の参審裁判官から構成される参審裁判所が判断します。三人の裁判官（内一人は職業裁判官が進行役務め、他の二人は参審員です）が陪審裁判所の部 (Kammer) を構成します。

法律家は、刑罰は犯罪行為と罪に相応なものでなければならぬと言います。つまり、被告人が行ったことだけでなく、被告人の罪も問題になります。行為犯行だけでなく罪に対しても、どのような刑罰がふさわしいかを判断することは難しいです。法律から導かれる刑罰の最大限と最小限の範囲がきわめて広いのです。何かを盗んだ者は、その窃盗に対し罰金刑を受ける可能性がありますが、5年までの禁固刑が科せられるかもしれません。この同じ広い範囲の刑罰と言う点では傷害罪にも当てはまります。例えば、誰かを死なせた者は、5年から終身の懲役刑が宣告されます。

刑罰を科す根拠は犯人の罪です。しかしながら、その刑罰により犯人の将来の人生にどのような効果が期待できるかということも考慮されなければなりません。裁判所は、犯人に有利に作用すること、そして犯人に不利に作用すること、このすべてを吟味しなければなりません。殊に重要なのは、犯人がどのような動機を有していたか、犯人の行為が他の人、特に犠牲者にどのような影響を与えるかということです。既に罪を犯した、言い換えれば、既に有罪判決を受けた犯人においては、その行為は量刑を加重させる結果をもたらします。犯人がそのその行為後、どのように行動したかは、減刑を酌量すべき方向に作用します。個別のどの要因もどの程度考慮されるかは、裁判官や参審員に委ねられています。裁判官や参審員は、大きな裁量を有し、犯人および行為にふさわしい刑罰を見つけることはどの個々のケースにおいても難しいのです。

その際に重要な尺度は、従来の判決です。ある裁判官は、自分の事務所にみずからの以前の判決を集めたバインダーを備えていると話し、その裁判官はそこで時々、比較できる事例においてどのような刑量の適用を決めたかを確認しているといいます。2018年に裁判官、検察官、弁護士および法学を専門とする大学教授らは、ライブツィヒで開催された法曹大会（Juristentag）において刑法にかかわる判決を指針としてインターネットにて集めることで意見が一致しました。そうすればその裁判官らは、類似案件においてかつてどのような判決が下されたかを見つけ出すために自分の担当案件を入力することができます。そうすることにより裁判官らは、それを指針にすることができます。

法律家たちは、当然のことながら刑罰の目的についてもじっくり考えます。19世紀までは刑罰は償いと報復に役立つという、いわゆる絶対的刑罰論が支配的でした。犯人は、自分が行った行為に対して代償を支払った場合、初めて正義が存在した【→する】といいます。

しかしながら、相対的刑罰論に従う法律家がますます増えています。刑罰の目的は本質的には、さらなる犯罪行為の防止にあるとする見方です。一方では、さらなる犯罪者がそのような犯罪行為を行うことを思い留まらせることにより、一般予防論がありますし、他方では特別予防論があります。犯人がもはや全く犯罪行為を行わないように、刑罰を受けるべきであるという考えです。犯人は、刑罰により犯罪行為とは無縁の人生を教えられるといいます。有罪の判決を受けた者の更生はそのようにして達成されます、それはきわめて希です。再犯率は高く、刑罰が厳しかったなら、それにつれて再犯が増えます。社会復帰は希にしか達成されません。しかしながら、禁固・懲役により、有罪の判決を受けた者が刑務所に入っている間は、社会は有罪判決を受けた者からは守られています……。

さて、ドイツではこの放送時点（2019年5月）において、刑務所収容者が約5万人であることが紹介されていますが、昨年末の報道によれば日本でも近年では刑務所などの刑事施設への収容者数は2006年の8万人超をピークに年々減り、2019年末には5万人を下回る可能性が高いということでした。人口では日本がドイツをやや上廻りますが、刑事施設収容者数は両国でほぼ同数というのは、偶然の一致だとしても興味ある数字だと思います。

放送および課題において「刑罰が厳しければ、それにつれて再犯が増える」という指摘がありますが、私には意外に感じられましたし、むしろ全く逆に思っていました。改めてインターネットで検索してみると、そのような論文や解説もありますので、これが定説になっているのかもしれない。

ところで、現在世界中で蔓延している新型コロナウイルス感染ですが、今回話題になって

いる刑の執行される施設である刑務所においても感染が拡大し、実際に米国では、暴動の発生やハンガーストライキの実施などが見られる事態となっているという報道がありました。密閉、密集、密接のいわゆる「三密」の環境にある刑務所や拘置所は感染症には脆弱な施設だといえます。日本でも先日、複数の拘置所の刑務官や職員が感染したという報道があり、今後の行方が懸念されるどころです。

ところで、ドイツの現役の裁判官や刑務官が本を出版したり、公の場で発言したりすることは以前の放送・課題でも紹介されており、その時も日本との違いに驚いたものでした。今回もベルリンのベテラン裁判官が取材に応じており、私は同じような印象を持ちました。

今回の放送で登場する「不幸中の幸い」という表現は、この放送を聞くまでは日本語特有のものだと思っていました。今回放送に出てくるこれに相当するドイツ語 Glück im Unglück は、まさに日本語とまるで同じ表現です。もし英語でも同じような内容を「不幸」と「幸福」という対語を使つての表現があれば、日本の先人たちが英語またはドイツ語から翻訳することにより「不幸中の幸い」ということばが生まれた可能性があります。でも英語にはないようです。「不幸中の幸い」という表現が、日本語とドイツ語で別個に生まれたものだとすれば、興味が沸くどころです。

また、今回のテーマの性質上、多くの司法・法律用語が登場します。私はいくつかの用語はドイツ語および日本語でも知っていましたが、今回初めてドイツ語での表現が分ったこともあり、勉強になり今後役に立ちそうです。例を挙げると、schuldfähig 「責任能力のある」や schuldunfähig 「責任能力のない」 wegen gefährlicher Körperverletzung und versuchtem Mord (Mordversuch) 「危険な傷害罪と殺人未遂罪により」 因みに wegen は 2 格支配の前置詞であると学生時代には習いましたが、手元の辞書にも「まれに 3 格支配」と記載がある通り、今回の放送でも 3 格支配となっています。他にも Resozialisierung 「犯罪者などの社会復帰」 Rückfallraten 「再犯率」や Rückfälle 「再犯」などの用語があります。

さて、4 年前に襲撃の被害に遭ったベルトホルトさん (Frau Berthold) という 80 歳の女性の話が印象に残りました。医者へ行く途中、ナイフを持った男性がベルトホルトさんを襲います。ベルトホルトさんは歩行補助杖をひったくられ、地面に倒れます。その後も杖で殴られましたので、殺されると思いました。しかしながらその時幸いにも 3 人の男性がやって来て警察官が来るまでその男を取り押さえてくれましたので、何とか助かりました。犯人は数ヶ月後、傷害罪および殺人未遂により裁判にかけられましたが、麻薬中毒のため責任能力がないと判断されました。襲われたベルトホルトさんにとってはこの

判断を理解し、受け入れるは現在でもつらいといいます。彼女は肉体の傷だけでなく、心にも大きな傷を負いました。それでもベルトホルトさんも出席する裁判でこの事件の審理が行われ、何が起きたか語る事ができたのは、わずかな慰めでしかないとしても補償の一部 (ein Teil der Genugtuung) になりうるといいいます。当事者でない私にとってはこれを理解することはなかなか難しいですが、そういう考えも有り得るのかと思いました。ベルトホルトさんにとっては何とも不運な出来事でしたが、今後時間の経過と共に少しでも心の傷が癒やされていくことを願うばかりです。

K. K.

2020年5月26日

2020年5月 Nr. 470

今回は、多くの人に関心を持っていると思われる食と健康をめぐる話題です。

バイエルン放送 (der Bayerischer Rundfunk, 略して BR) においてラジオ媒体だけでなくテレビ媒体においても健康をテーマにした放送を特に多く届ける日を「健康の日」 („Gesundheitstag“) と呼んでいます。2019年では5月14日と10月22日がその日にあたりました。5月14日にはこのような放送の一つが第二放送プログラムにおける午前プログラムの二時限目のルポルタージュとして放送されました。その番組の女性取材記者 (Frau Ficociello) は、シュライターさん夫妻 (Herr und Frau Schreiter)、ゾンマーコルンさん (Frau Sommerkorn) およびブロムバッハドクター [博士] 教授 (Frau Professor Doktor Brombach) の各氏にインタビューを行いました。

シュライターさん (Herr Schreiter) は 62 歳になるエンジニアです。太り過ぎていた父親の死亡後健康というテーマに関心を持ち始めました。なぜならば、シュライターさん自身がここ数年の間に太り過ぎていたからです。シュライターさんは栄養・食物に関する本を読みあさるとともに、シュライター夫人がフリーランスのスポーツ教師として忙しいにもかかわらず、家族のために日に 2 度は料理することにより、その理論を実践するよう努めています。

シュライターさん (Frau Schreiter) にとっては「健康とはどういうことか」という問いに答えることは全く簡単ではありません。誰にとっても健康であることの意味は異なると思っています。個々人の生活を観察しなければならないといいます。というのは、老人ホームでずっとソファに座っている人にとって健康とみなされることは、建設作業員のものとは異なるからだといいます。シュライターさんにとって食事とは、とりわけ変化に富んでい [多彩で] なければなりません [あることが必要です]。シュライターさんは、自分の体のためになること、ためにならないことに対する感覚・感性を磨いてきましたし、食事で満ち足り、かつ満足するための調理法や食べ方について自分なり方法を見つけました。

ブロムバッハ教授は、チューリッヒ大学の応用科学分野の栄養学の講師を務めています。ブロムバッハ教授は、人は太り過ぎないためには砂糖の摂取を控え、新鮮な野菜を多めにとるべきであるということを理解するでは十分ではないといいます。というのは、人の食行動は、生理的な観点だけでなく、教育や文化的な考えのような多くの他の要因、つまり社会的な観点によって決まるからです。

人間は年を取ると、必要なエネルギー量は減少します。しかしながら栄養素、つまりミネラル、微量元素およびビタミンの必要量は変わりません。また食べる量は減ります、つまり食べる内容については極めて注意深く選び抜く必要があります。微量ではあるものの人間が必要とするすべての栄養素を含む栄養価の高い食物を摂取するよう注意を払う必要があります。

人がいつも繰り返し好んで食べるものは、どこで育ったかに左右されます。ゾンマーコルンさんはフリーランスのペディキュア美容師で、50歳になったばかりです。体重に関しては今まで全く問題はありませんでしたが、今はちょっと減量したいと思っています。女性取材記者がゾンマーコルンさんがある火曜日の晩に尋ねると、夕食の支度をしています。それは、にんじん、にんにくそれにタマネギを入れた自家製のソース付きの麺です。

ゾンマーコルンさんは生まれも、育ちもミュンヘンです。しかし、ゾンマーコルンさんがまだ幼い頃、両親が離婚して以来、オーバープファルツ (Oberpfalz) の父親のもとで多くの時間を過ごしました。そこでゾンマーコルンさんの大好物となったのが、オーバープファルツの名物料理でした。このスープは常に特に好んで食べます。牛乳を多く使って調理しますので、このスープは白く見え、白いスープと呼ばれています。そこにはパンも加えます。従って、このスープのカロリーは高いです。ゾンマーコルンさんが減量しようと思うのであれば、たぶんであればこのスープはもう食べないでおくべきところでしょうけれども、食べることが人に喜びを与えることも重要です。

ゾンマーコルンさんにはボーイフレンドがいます。しかしながらボーイフレンドと毎日夕食を共にすることは難しいだろうといます。例えば、ボーイフレンドは生のパセリは全く受け付けませんので、ゾンマーコルンさんが二人用にちょっと料理をする場合には、このことに注意しなければなりません。ゾンマーコルンさんが調理にパセリを使おうものなら、その食事はボーイフレンドには台無しになってしまいます。しかしながら、ゾンマーコルンさんにはパセリは、多くの料理に必要不可欠なものです。従って、ゾンマーコルンさんは一人で自宅で食べるが多くなります。二人が一緒に食べたいと思えば、レストランに行きます。

人の食行動に影響を与える他の社会的要因が常に存在します。例えば、1950年代に米国から最初の調理済み食品がやって来ました。その後台所調理用器具において変化が生じ、食に関わる最大の変革は電子レンジの使用〔投入〕によるものでした・・・。

さて、シュライター夫人が健康のために食品には注意を払い、新鮮な野菜、有機食品を買っているというのは、食品には比較的注意している私にも容易に理解ができますが、更に

小麦粉も自ら碾いているというのには驚きます。食品に注意を払っていてもそこまで徹底している人は珍しいと思います。これは日本で言えば、例えば、そば好きでかつそのそば粉にもこだわりのある人が市販の既製品を求めず、蕎麦の実からそば粉を自分で碾いて蕎麦を打つようなものだと思いますので、かなりの少数派に属すると思います。

また、ゾンマーコルンさんとボーイフレンドのパセリに関する話にも興味をそそられましたが、一方ではボーイフレンドの頑なとも思える姿勢には多少疑問を感じました。今回の放送の取材を受けたゾンマーコルンさんは、ボーイフレンドに取材を受けたことも話しているだろうと考えられ、この放送を聴いたのではないのでしょうか。食べ物の好みは生まれつきではなく、変えられることも紹介されていましたので、ボーイフレンドも徐々にパセリにトライしてみてもはどうでしょうか。その際ゾンマーコルンさんのにんにくを食べるようになった切っ掛けも改めて語り、ボーイフレンドにパセリにトライしてみることを勧めてもどうでしょうか。Beiheftによりますと、ゾンマーコルンさんの母親がにんにくが大嫌いだったため自身も嫌いになっていましたが、20歳頃に女友達と共にしたキャンプファイヤーでのフランスパン、バターそれににんにくとの出会いにより、にんにくが美味しいことを発見し、現在に至っているというエピソードは是非ボーイフレンドに話してみても欲しいと思いました。いや、ひょっとしたら、ボーイフレンドは2019年5月の放送を聴いた後、既に試行錯誤を重ねている最中かもしれませんし、試行錯誤の後現在では既にパセリを食べられるようになっているかもしれません。是非その結果を知りたいものです。

さて、今回の放送および課題において、戦後大きな影響を及ぼした調理家電製品として電子レンジの登場があげられています。電器冷蔵庫、電器炊飯機（特に日本において）、ジュースメーカー、コーヒーメーカーなど、私たちの生活を快適にしてくれる調理家電製品は数多く存在しますが、やはり最も生活を便利にしてくれたのは、電気冷蔵庫と並んで電子レンジだろうと思います。もっとも、「調理」に限定しなければ、戦後の生活を格段に便利にした家電製品としては、テレビ、洗濯機、エアコン、空気清浄器、掃除機（およびロボット掃除機）、テープレコーダー（現在はICレコーダー）、パソコン、ファックス、携帯電話（最近スマートフォン）など多くのものをあげることもできます。さて、電子レンジに話を戻しますが、電子レンジで調理することを日本語では擬声語を使って「チンする」と表現しますが、先日のあるテレビ番組において、この言葉の由来は1967年に日本の某家電メーカーが料理のできあがり音を知らせるために採用したということが紹介されていました。これは初めて知りました。また数年前の文化庁の調査によると国民の9割がこの「レンジでチン」という言葉を使うという記事がありましたが、手元の国語辞典にも確かに「ちんする」という語彙が掲載されています。この言葉を日常では使用しない私にとっては辞書に掲載されていることは正直驚きました。ドイツ語では「レンジで温める」は手元の独和辞書やインターネットによると *in der Mikrowelle aufwärmen* と表現するようですが、

日本語の「ちんする」のような擬声語を使った口語表現はドイツ語でもあるのでしょうか。

K. K.